

## 自己評価報告書(最終報告)

報告者

芸術系コース(美術)／栗原  
慶

## ■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

## I. 学長の定める重点目標

## I-1. 教員養成大学教員としての授業実践

中央教育審議会は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申したが(平成24年8月28日)、その中で「教員を高度専門職業人として明確に位置付ける」と提言している。この答申の考え方を実現するため、教員養成大学に籍を置く教員として、将来、教師を目指す学生に対してどのような授業実践を展開すればよいか。あなたの取り組みを、①授業内容、②授業方法、③成績評価の三つの観点から示してほしい。

## 1. 目標・計画

①授業内容について—特に工芸に関する科目については人・自然・生活という要素を内包しており、これは美術教育の中で人間形成に寄与する度合いが高い分野であると考えている。工芸・陶芸と名の付く科目に関しては、自己と他者の関係性を制作を通して実感する機会として供したい。その他の美術科・図画工作科に関する授業については、造形力やデザイン力といった基礎的な実践力の育成を目的に学生自身が上達を実感できる内容とし、将来自信を持って教科の担当が行えるように指導したい。

②授業方法について—美術系コース実技授業の特徴として、素材に助けられるか振り回されるかのどちらかで過程も結果も大きく変わってくる。直感的にそれを理解できない学生に対してのケアが大切で、その専門の楽しみを授業の導入部で取りこぼさないよう前半期は「学生自身が楽しむ」「他者の作品をお互いに肯定する」といったことを実践させる。後半期その成果が形となってくるが、教員側からは作品に対しては「否定」は行わず方向性の提示にとどめ、学生間でのディスカッションやレポート提出によってその結果を検証させる。技術面の指導については、図画工作 I でのグレード制の継承や、またその他の授業でもオフィスアワーに限らず可能な限り対応し指導していく予定である。

③成績評価について—出席状況を基本とし、受講姿勢、提出作品を総合して判断している。受講生に対してはその制作過程の重要性と、道具の整理・扱い・清掃がものづくりにとって一番大切なことであることも指導し、評価内容の基準であると伝達していく。

## 2. 点検・評価

①授業内容について—前期・後期の1年を通じて、年度目標に挙げたとおりの授業内容を心がけ実践した。授業評価アンケートでは肯定的な意見が多く、それぞれの授業の目標を果たしたと感じている。学生各々が工芸に対する認識を新たにし、その作品に達成感を持って接することができていた。受講学生が多い場合の対応と、道具設備の扱いの指導については今後改善する点があったが、講評時に問題として取り上げ、学生自らが教育現場に立った際の反省点とするよう指導した。

②授業方法について—導入ではそれぞれの授業で取り上げる点について、VTR視聴や資料配布などで歴史や背景を説明し実制作に入り、学生自身の動機付けを明確にさせた。制作途中、中だるみや方向性が見えなくなる学生も出てくるため、中間講評を行うなどして制作意欲の維持に努めた。年度目標・中間報告で挙げた点についても予定通り実践した。美術・工芸の特性上、反復修練や適時制作にかかわることが必要になることが多いので、授業以外の時間も可能な限り対応し、質の向上をはかった。

③成績評価について—ガイダンスや授業最終日のアンケート実施の際にも評価基準は伝達し、適切に評価した。

## Ⅱ. 分野別

### Ⅱ－1. 教育・学生生活支援

#### 1. 目標・計画

新1年生の担任を担当することから、学生の専修・進路希望についての相談や指導を積極的に行う。また履修登録や学修キャリアノートでの的確な助言が行えるよう、単位取得や実地教育内容の理解に努めたい。ゼミ生についても、研究計画と進路に関して常に対応を心がけ、きめ細かく指導していきたい。授業に関しては図画工作 I を新たな体制で担当するので、その実践が来年以降の授業にも活かせるよう、学生の成果と反応を見極めながら慎重に回を進めたい。

#### 2. 点検・評価

1年生担任については、年度当初は教員自身が赴任2年目という事もあり、あわじ合宿での履修指導は十分に行えなかった面もあったが、その後1年を通して、学生の様子や成績状況などの把握に努め、適切な指導を心掛けた。ゼミ学生についても、毎週のゼミの時間だけでなく、学生個々の様子を鑑みながら、適時指導に当たった。修了生の修了研究も一定のレベルに到達できたと考えている。長期履修生のふれあい実習や学修キャリアノート指導も行なっている。全体を通して指導・支援を遂行できている。

### Ⅱ－2. 研究

#### 1. 目標・計画

作品制作においては昨年同様日本工芸会の公募展での評価を得られるよう、従来からの磁土による素材表現の研究制作に邁進する。設備更新をして頂いたことから、実制作にその設備を最大限活かすよう成形方法の研究と焼成テストを行い、青白磁表現を追求する。また工芸教育研究として、「伝統工芸の役割」「生活と芸術」をテーマとした研究を進める。その他に、図画工作科・美術科の教科書作成にかかわる予定である。

#### 2. 点検・評価

2013年度内の作品発表は、画廊発表2件を行い、公募展応募入選2件を含め計4件の発表を行った。公募展は日本工芸会四国展、全国公募の陶美展入選となった。また日本工芸会四国支部研究会や、その他の発表の際のギャラリートークにも積極的に参加し、省察に努めた。美術・工芸教育の研究としてもこれらの制作が生かされる点を精査し、美術教育研究会での様々な事例を参考に授業内容改善・教材研究に努めた。

## Ⅱ－3. 大学運営

### 1. 目標・計画

本年度は学部入試委員として入試にかかわることから、慎重にその責務を果たしていきたい。またエコアクション21専門部会委員として身近なエコ活動や、部会運営に協力していきたい。

### 2. 点検・評価

学部入試委員は代理選出ということで1年間であったが、入試運営について把握できた部分も多く、業務を遂行できた。中間報告でも述べた教採実技ガイダンスでの指導、知人教員がいる大学への大学院パンフレットの送付も行った。また、エコアクション専門部会の委員活動においては、現地審査対応者として対応し第4部の取り組みを紹介した結果、評価を得ることが出来た。

## Ⅱ－4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

### 1. 目標・計画

附属学校園の研究発表会・教育実習等には極力参加し、学生指導に努める。本学の公開講座も担当する予定である。また今年度も附属学校授業で制作した陶芸作品焼成や、徳島県下のデイクアサービスでの陶芸制作助言なども行ってきたい。

### 2. 点検・評価

中間報告のとおり、公開講座でのデッサン指導、大塚国際美術館の展示企画協力をおこなった。公開講座は今年度初めて担当したが、社会人の方々の熱心な姿勢に応えられたと感じている。大塚国際美術館での展示協力は、古代ローマ陶「コタボス」の再現をゼミ生と共に行ったものであるが、夏休みの期間、子供たちにも身近に古代ローマを体感してもらい趣旨で行なわれた企画として好評を得ることが出来た。また学園都市化構想の一助として、鳴門中学校での美術の授業(ガラス制作)に協力した。生徒達に好評だったとの報告もあり、来年度も実施の予定である。附属学校での研究授業にも積極的に参加し、材料特性の活かし方などを議論し、自身も現場から多くを学ぶことが出来た。

### Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

エコアクション21現地審査に应对し、粘土再生の取り組みなどが環境マインドを持った人材養成に貢献できている活動として、総合評価の中でよい点として評価された。